海を守り育てる―神恵内村藻場LANDプロジェクト事業

「磯焼けの海を海藻の森林へ」をテーマに、神恵内村では平成22年秋から「神恵内村藻場LANDプロジェクト事業」を進めています。そこで今回は、同事業の内容と、生まれ変わりつつある海の様子を紹介します。

藻場の造成と再生の流れ

水深3～5m地点の赤石沖の海底

コンブを食べるウニを採って別の場所へ移す

胞子をたくわえたコンブをスポアバッグに入れて海中へ投入

約3カ月後の海中の様子

徐々に生育するコンブ

約6カ月後のコンブ

おととしから始まった企業参加型の磯焼け対策

沿岸からコンブなどの海藻がなくなっていく「磯焼け」。「海の砂漠化」とも呼ばれているこの磯焼けが進むと、魚の産卵や育成場となっている藻場が失われ、ウニやアワビの実入りも悪くなるなど、沿岸漁業は大きな打撃を受けるようになります。

神恵内村を含めた道内の日本海側沿岸地域ではこうした磯焼けの被害にかねてより頭を悩ませ、それぞれの地域でさまざまな磯焼け防止の取り組みが行われてきました。こうした中、神恵内村が平成二十二年度から取り組み始めたのは、多くの費用がかかる磯焼け対策を企業からの協賛金で賄う藻場造成プロジェクト事業。協賛金での藻場造成は道内でも珍しいといわれ、道内外十数社から寄せられた協賛金をもとに、二十二年度の第一期、二十三年度の第二期事業を進めています。

成功を収めた海の畑づくり

同村が取り組んでいる藻場LANDプロジェクト事業は、藻場の再生と漁業生産力の向上。同村の赤石漁港沖水深五～七㍍の海底に約千平方㍍の藻場を造成し、この藻場を再生させるため、コンブを食べるウニを藻場から採って別の場所に移し、藻場の四方にウニの侵入を防ぐフェンスを設置。その後、胞子をたくさんたくわえたコンブをスポアバッグという専用の袋に入れて海中に置き、胞子の定着を促しています。

二年にわたる成果は上々のようで、同村産業建設課の玉川量規課長は「順調に海藻も生育しており成功したと言えるでしょう。この事業は漁業者の自主的な活動が不可欠で、今回の成功もその力が大です。これからの課題はこの藻場のメンテナンスをどのように進めていくかですが、皆さんと力を合わせて豊かな海に戻していきたいと思っています」と話します。

六月のシンポジウムでその成果を広く披露

いわば、村を挙げての今回の事業。今年六月中旬には、同事業の成果を報告する「海の森林づくりシンポジウムin神恵内」が開かれました。このシンポジウムは、開村百四十年・消防組織百三十年を記念して行われたもので、第一部では成果の報告、大学准教授による基調講演、パネルディスカッション、第二部ではテレビでおなじみのさかなクンによるトークショーが行われました。

パネルディスカッションでは「成功の要因はウニの密度管理とコンブの母藻を投入したこと」「磯焼け対策はまだ始まったばかりで、一朝一夕で進むものではないが、神恵内村は特筆すべき成果を挙げている」といった高い評価が出されています。

同村が取り組む藻場造成。神恵内の青い海を眺め、「小さな漁村から地球のことを考える」ともいうべきこの事業の意義にちょっと思いを寄せてみてはいかがですか―。

6月中旬に開かれた「海の森林づくりシンポジウムin神恵内」の様子

※掲載の海中の写真は㈱エコニクス、シンポジウム関連の写真は神恵内村提供のものを使用しています。

＜情報募集中＞係では、みなさんからの楽しい話題や情報をお待ちしています。お気軽にお知らせ下さい。